

文章構成法を意識した書くことの指導

国語 第2学年及び第3学年

宝達志水町立押水中学校・教諭

1 事例の概要

本校ではこれまでに評価規準の見直しや基礎基本の定着に向けた手だての工夫など、いろいろな試みがなされてきた。こうした経過を踏まえ、国語科では個を生かし、伝え合う力を高めるために、何が重要課題かについて検討した。その結果、生徒の実態を踏まえ、書くことを学習の中心にすべきだという結論に達した。

教育課程の展開において、音声言語の指導が盛んに行われ、教科書等でも話し合い活動が多く取り入れられている。話し合い活動を通じたコミュニケーション能力や情報活用能力の育成は、現代社会には欠くことのできない力である。しかし、それらの力のもととなる心のつぶやきを豊かにわかりやすく表現する能力は、書くことを通して言葉を吟味し、論理的に文章を構成することで養われると考えた。

そこで、「書くことを厭わない」「書くことを通して自己を見つめる」、そして「書くことでつながり合いを実感する」ことをねらいに実践を試みた。

A-1 研究の内容

2 実践内容

(1) 単元の目標

文章構成法（「起承転結」「双括式」）を言語化して意識することで、自分の考えを論理立てて表現する力を養う。

(2) 指導上の工夫点

① 指導の工夫

2年、3年と2年間にわたって文章構成法を意識しながら書く学習を進めた。2年次では「起承転結」を意識して感想文を書く学習を、3年次では「双括式」「頭括式」「尾括式」を意識して報告文をまとめる学習に取り組んだ。書くことのパターンを示したワークシートを使い、書くことに対する抵抗感のある生徒に意欲をもたせることを目指した。

② 評価の工夫

定期テストにおいて「書くこと」に関する問題を設定し、個々の生徒の到達度を調査した。その結果を受け、他の場面においても課題設定の妥当性を検討しながら、既習内容の定着を図った。

B-1 単元計画

3 指導の実際

段階	時間	学習内容・活動	評価場面・評価方法および 支援（・）
導入	5	1. 前時までの活動を振り返る。	・読みの視点について確認する。
		2. 本時の学習の説明を聞く。	・起承転結のパターンについて説明し、文章を構成するように促す。
		小説「ゼブラ」、随筆「字のないはがき」のどちらかの感想を、前時までの感想メモを参考にしながら文章にまとめよう。	
	40	3. 文章構成を考える。	メモの交換によって深まった感想を、構成を工夫しながら、文章にまとめている。

展			<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>起承転結の部分にあたる括りをワークシートに書き込んでいるかで評価する。</p> </div>
開		4. 生徒作品を参考にしながら、起承転結の構成法について理解する。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>Cへの手だて シートの記入状況を見て、起承転結を使ったまとめ方を助言する。</p> <p>Aとするキーワード ・「転」に適切な内容を書いているか。 ・基本的な構成をふまえながら、独自の工夫がなされているか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・実物投影機で作品を提示し、構成のまとまりについて全体で考えさせる。 ・完成していない生徒は確認を支援として作品を仕上げさせる。
まとめ	5	5. 本時の学習で学んだ事柄について、ノートに記録する。	<ul style="list-style-type: none"> ・構成の基本パターンである「起承転結」の構成は、文章を書くさまざまな場面で参考になることを知らせる。

C-1 指導案

C-2 ワークシート

4 成果と課題

(1) 成果について

学習後も、折に触れ「起承転結」の構成法を言語化して示した。特に漢詩の授業では、内容がつかみやすいため反復学習としては効果的だった。漢詩の学習後、文章構成への関心が増し、他の場面でも「起承転結」の柱を立てて下書きを進める生徒が多く見られるようになった。

また、学習直後の中間テストで書く力を問う問題を出題したところ、評価規準に到達しない生徒が全体の53%もいた。しかし、その後の学習場面でも、折に触れ構成法を意識させた結果、生徒の口から「こういう場合は尾括式が書き易いね。」とか、芭蕉の「おくのほそ道」冒頭文では「芭蕉は頭括式で書いているね。」といった言葉が自然に出るようになった。そして、期末テストで再度、構成法を指定して自分の考えを書く問題を出題した。その結果、A、B評価の生徒は全体で70%に達した。これは他の学習場面でも文章構成法を言語化して認識するようになったことで、次第に生徒全体に浸透していった結果ではないかと考えられる。

さらに、これまでは30字程度の書く課題であってもなかなか埋めることができなかった生徒の中から、「双括式で書くときは字数が多くないと書きにくいね。」という声も上がるようになった。これは書くことに対し、自信が持てるようになった結果であると考えたい。

(2) 課題について

文章構成法を身につけることで、自信をもって文章を書ける生徒が増えたことは成果であった。今後はパターンを身につける段階から、独自の考えをより効果的に表現するための工夫ができる段階へと高めていかなければならない。そのための手だてとして、生徒作品を通し、内容に応じた文章構成を考えさせたり、言葉を吟味したりする場面を多く設定していきたい。

研究概要でも述べたように、文章を書くことによって自己の内言語をより豊かなものにするのが国語科としての確かな力を身につけることにつながるものと考えられる。

D-1 テスト結果